

## ニューズレター

第2号 2008年3月

## Contents

- |                       |                   |
|-----------------------|-------------------|
| 1 - 学生の多様化と大学教育       | 4 - 講演会等報告        |
| 2 - 研究所メンバーの紹介(客員研究員) | 5 - FDの現在 第2回     |
| 3 - FD活動に関する教員調査の実施   | 6 - 2007年度後期研究所日誌 |

## 学生の多様化と大学教育

非常勤でいわゆる F ランクといわれる大学に心理学を教えに行っている。京大ではまず見られない学生群がごろごろいて、私はとにかく勉強になると思ってこの 10 年熱心に通っている。

教員にため口、平気で遅刻、やる気ないならやめろと言ったら簡単にドロップアウト、でっかいサングラスをかけてまるでハワイ旅行…。こんな例は挙げていけばきりが無い。こうした学生たちにもともと大学とは…、と言ったってしかたない。昔一、二度言ったことがあるが、言ってみてよくわかった。ああそう、という反応だ。大学に対するイメージも私たちが持っているものとはずいぶん異なる。

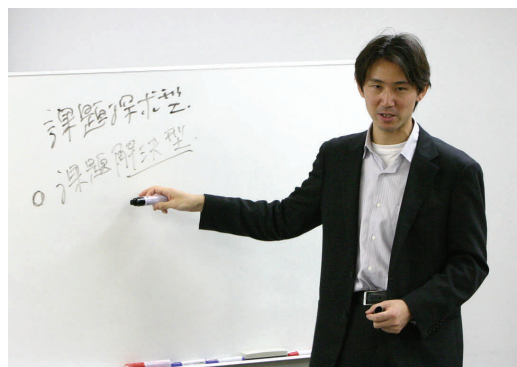
こんな話は、看護師の学生実習や新人研修でもよく耳にする。平気で寝坊したと言って遅刻。患者さんと友達気分。少しきつく注意すると、親が出てきて逆に説教を受ける。ゲームおたくでほとんどコミュニケーションができない。挨拶くらいしろ！と言いたくなる。そんな人は辞めさせたらいいんじゃないですか、と言うと、人手不足で、看護協会からは育てろ、と強く通達が来ているらしい。新人指導担当にあたった看護師はストレス満載である。大学の現場と何かしら似ている。

しかし、だから何だというのだ。こんな学生、最近の若者の多様な姿は、今も昔も時代を越えて繰り返されている。今時の若者論は今日だけのものではない。社会が変わり、人の生き方、人生観も多様化、個性化し、大学教育に求められる姿も変わってきている。学生の多様な姿に驚くことはたしかにあっても、それで教育や授業の目標、看護の世界で言えば実践のポイントが変わるわけではない。目標やポイントをしっかり見据えて教えないとダメなことをしっかり教える。学生がしっかり学び、理解しているかをチェックする。それがうまくいかないなら、うまくいくように授業をデザインし指導を入れる。ただ、それだけのことだ。学生たちと友達になろうという話ではない。いかに教え学ばせるか、教育や実践の目標たる落としどころに学生はしっかりと落ちているか、そこだけを見ればよい。

学生の多様性というか、ときに奇怪であったりするその言動は私は大きな問題ではないと考えている。それが授業の進行を妨げるものであるのなら、厳重に注意するだけのことである。それができないというのなら、大学教員なんて務まらない。

溝上 慎一

(京都大学高等教育研究開発推進センター准教授)  
(比治山大学高等教育研究所客員研究員)



学生の勝手な言い分に振り回されて授業をしっかり運営できないのは困るので、私は上記の大学では、ため口と遅刻、私語に関してはうるさく指導する。「俺はお前の友だちか？」と言わなければならないことが一年に一、二回は必ずあるが、それを言うと、ちゃんと敬語が使えるのだから、結局はどういう気分で教員と接したり授業に参加したりしているかという問題なのだわかってくる。どんな大学であっても、敬語を使えない学生には出会ったことがない。そう考えると、学生の気分をしっかりと授業に向かわせるものにするいくつかのコツが大学それぞれにあるのだわかってくる。

だから、京大ではこんな話は役に立たない。例外はいくつかあるが、基本的に学生たちはよく勉強するし、私語はない。言葉遣いも、いちおう面と向かうときには(?)きちんとしている。京大生は最近おしやれになってきた、こんな話も教育には関係ない。多くの平均的な京大生で問題になることがあるとすれば、それは与えられる課題以上の勉強をしているか、ということである。講義や演習で彼らは「おもしろかった」「考えさせられた」と簡単に言う。しかし、教員は単におもしろかった以上の世界にどうやって導けるかが課題となる。こちらが知っている内容だけを一方的に伝える授業では、この課題はクリアーしない。学生の縦横無尽に展開する、ときにはこちらの関心世界を越える思考についていき一定程度こちらの理解するところに導くことが必要となる。京大であれば、そんなことが課題となる。

大学を出て、多くの者が一様に安定した職種、大手の会社に就職するといった時代は終わった。仕事をはじめ人生をどう

デザインしていくかが個人に委ねられるようになった。多くの者にとって、物質的な豊かさが幸せの指標では必ずしもなくなった今日、幸せの具体的姿が個人に委ねられている。

多くの学生たちにとって、勉強はそんなに楽しいものではない。そんななかで、一昔前と違って熱心に勉強に取り組む学生の姿がかいま見えるとすれば、それは学生が勉強を通して人生形成に真正面から向き合っているからである。将来を真面目に考えるからこそ、一般の学生は勉強をする。その理由や動機の質は非常に個性的で、一昔前の学生が持つものとは雲泥の差がある。

しかし、ゼミや研究室での個人指導、少人数指導を別として、教

育とは結局教員の設定する目標に学生を向かわせる営みである。どれだけ学生の個性的な世界観に立とうとしても、最後はこちらの理解可能なところに収束させ評価しなければならない。教育とはそういう営みである。それでも学生たちはそうしたなかで、個性的な世界をつくり出し社会に出ていく。

学生の多様化という話と教育の話は、ポジショニングを分けて、それぞれの立場から考える問題だと私は考える。今回は、教育にポジショニングをして話をした。次回は、学生の世界にポジショニングをして学生の世界から大学教育を見ることとした。 (次回につづく)

---